

港区立郷土歴史館

歴史館だより

ふるさと古城へよせて ―ある図案家の来し方―

神谷 蘭
(学芸員)

富山県高岡市には、「古城」と呼び親しまれる高岡城跡があります。近代以降は古城公園として、水濠に囲まれ四季を通じて美しい自然を感じられる憩いの場になっています。この古城のそばで、ひとりの図案家が産声を上げました。

中山亘一は明治17(1884)年、高岡市末広町の漆芸を営む家に生まれました。高岡のまちは銅器や漆器の産地として名高く、ものづくりがすぐそばで息づく場所でした。中山は明治32年に設置されたばかりの富山県工芸学校図案絵画科(同34年に富山県立工芸学校に改称)に進学します。当時主力輸出品であった工芸品のデザインをより魅力あるものに改良しなければならないという課題に直面していた日本政府は、図案の専門的な教育の拡充をはかりました。同校図案絵画科はその過程で設置されたもので、中山は一期生ということになります。

中山の学生生活を少し覗いてみます。富山県立工芸学校では明治36年より工芸展覧会を開催しており、多くの来場者を集める一大イベントでした。この第1回展で中山が出品した「鴉ノ図絵画外二点」は95点で1等賞を受賞しています。この図の中に「古城」という落款を確認することができ、中山は在学中から高岡城にちなんだ古城という画号を使い始めていたことがわかります。また同校では明治35年、技芸の錬磨や文学、体育に専念する目的で始まった「尚美会」という組織が結成されています。中山は案図(原文ママ)部、運動部、雑誌部すべてに名前を連ねており、活発な学生だったことがうかがえます。

高岡での学生生活を終え、卒業後は家業を継がず上京し、図案の勉強を続けます。当時東京高等工業学校工業図案科で教授を務めた井出馬太郎に私淑のような形で学んでいたようです。明治40年頃には高島屋東京支店に勤め、同43年に独立自営し、図案の仕事に従事しました。この頃より芝区桜田備前町(現在の西新橋一丁目)に住み、その後の人生を西新橋の地で過ごしています。港区との縁は深いのです。大正時代

に入ると懸賞図案や展覧会へ出品をし、受賞の経歴も見られます。図案教育の黎明期に学び仕事をし、デザイナー第一世代のひとりだといえるでしょう。

晩年に自身で装丁からすべて行った大型の図案帖『國華』(当館蔵)は、大正末～昭和初期頃にかけて、高島屋を通じて皇室から受けた染織品の注文の下図や、図案作成のためのスケッチがおさめられています。中山は震災・戦災によって自身が手掛けた仕事の多くを失ったことを悲しみ、これが『國華』製作のモチベーションであったようです。中山にとっては数多くあった仕事のほんの一部かもしれませんが、それがひとつの形になり、守られてきた意味ははかりきれないほど大きいといえるでしょう。

中山は高岡に戻らず東京で人生の大半を過ごしましたが、同郷の友人達とは長く交流していたようです。同じく東京に出てきた同級生とは3人で仲が良く、歳を重ねてからも定期的に会って友好を深めていました。県人会にもよく参加していたそうです。生涯「古城」という号を使い続けたことに、故郷・高岡とその縁を大切に思う気持ちがあらわれているのではないのでしょうか。

特別展「ある図案家の仕事―宮中の染織デザイン―」では、中山の生涯をたどりながら、図案帖『國華』を余すことなく紹介します。ご期待ください。

参考文献

「尚美会会誌」第2～4号 明治35～37年 高岡市立中央図書館蔵



中山の使用した印章。一番大きな円印には「古城」の文字が見えます。(個人蔵)



港区立郷土歴史館

歴史館だより

vol.

17-2

2023.9.15

—暮らしの道具—

あか
灯りの移り変わり

宿澤 泉帆

(学芸員)

夏の盛りを過ぎ、暑さも和らいできました。これから秋、冬を迎え、徐々に夜が長く感じる季節がやってきます。夜は人間の視覚が及ばない時間であり、周囲を照らす灯りが不可欠です。灯りは、時代を経て、明るさを増し、人々の視野を広げ、夜の生活を豊かにしてきました。ここでは、「灯り」をテーマに、当館に収蔵されている資料を取り上げ、その歴史について辿ってみたいと思います。

1. 行灯

まず初めにご紹介するのは、行灯です。行灯は、油を入れた灯明皿に、麻布やイグサで作った灯芯を浸して火を灯し、紙を貼った火袋で囲って、風の影響を受けないように工夫した照明具です。行灯は、室町時代から、その祖型が見られ、もともとは携帯用の灯りに用いられていました。江戸時代に、提灯や手燭が携帯用に使われるようになると、行灯は室内に置く照明具として、用途に応じて様々な形に発展しました。

有明行灯は、寝室の枕元に置いて、終夜明かりを灯し続ける常夜灯の役割を果たしました。火袋の上にかぶせる箱蓋があり、側板が三日月型や満月型にくりぬかれています。読書をする際には、火袋の側面を開け、火を露出させて明るくし、寝る際には、箱蓋をかぶせて暗くするなど明るさを調節することができました。



有明行灯

2. ガス灯

明治時代に入ると、西洋で開発されたガス灯が文明開化とともに日本に流入しました。ガス灯はこれまで利用されてきた行灯や、江戸末期に伝来したランプよりも明るく、主に街灯に利用されました。明治5(1872)年に横浜で初めてガス灯が点火され、明治7年には、東京の銀座通りを含む京橋・金杉橋間に85

本ものガス灯が灯りました。写真のガス灯は、S字に曲がった導管からガスを通し、発光材を染み込ませた繊維を被せた火口に火を灯します。もう



ガス灯

一方の縦に伸びる金具の先端に金属の鑲がついてることから、上から吊り下げて使用するものであったと推測されます。ガス灯は、その後大正時代から昭和時代にかけて電灯が普及したことで、徐々に姿を消していきます。

3. 電灯

白熱電球は、アメリカで実用化され、明治23年に国内での生産が開始されました。その後、大正時代中頃には室内の灯りとして全国に普及しました。昭和時代の戦時下には、夜間空襲に備えて、灯火管制用2段階切換電球というソケットへのはめ込みの具合で明るさを調節できる電球が家庭で使用されました。ガラスの部分には遮光塗装がされ、外に光が漏れないようになっています。その後、白熱電球は、より消費電力が少なく、寿命の長い蛍光灯やLED電球に置き換わり、平成22(2010)年に生産を中止しました。



灯火管制用2段階切換電球

有明行灯・ガス灯は、コミュニケーションルームに、灯火管制用2段階切換電球は常設展示室Kに展示中です。ぜひ実物を見て灯りの歴史に触れてみてください。

参考文献

大西正幸著『生活家電入門 発展の歴史としくみ』 技報堂出版 2010年
木村茂光・安田常雄・白川部達夫・宮瀧交二著『モノのはじまりを知る事典 生活用品と暮らしの歴史』 吉川弘文館 2019年